

今回は漢字の創作法シリーズの最終回でした。拗体おうたいという、近体詩の作法に合わない詩の代表作として、猛浩然の『春暁』(春曉)と王維の『送元二使安西』(元二の安西に使いするを送る)という二首を学びました。

拗体とはねじれたスタイル、つまり型破りな詩を指します。では、逆に何時から型通りの作詩が重要になったかということ、科挙の試験項目に作詩が取り入れられてからだそうです。試験の採点をするために、どんなに素晴らしい詩でも、型にはまってなければ×にして、ふるい落としたりらしいです。

そういう訳で、以降の詩人が怖くて型破りな詩を書かなくなったとか。型破りでも、『春暁』のように味わい深い詩もあるのに、試験という制度に縛られて、型から出られなくなったのは、何だか残念な気がします。ですが、その前の初唐や盛唐時代にはしばしば近体詩の法則からは外れていても、読んでみると素晴らしい詩も沢山あったそうです。一方、厳しい作詩法があったからこそ、漢詩は時代を超え、地域を超え、東アジアの共通文化として定着したとも言えます。

さて、猛浩然の『春暁』といえば、日本人でも知らない人はいませんね。東京都町田市の公立小学校では小学五年生の国語の教科書に唯一載っている漢詩が『春暁』です。中国では物心ついた頃から暗唱している漢詩の中で、最も有名な詩と言えるでしょう。特に第一句の「春眠暁を覚えず」は日本人と中国人をつなぐ合言葉にしてもいいくらい誰もが知っています。私自身にとっても暗唱はモチロン、30年愛唱してきた愛着ある詩です。いつも、頭の中には朝霧に包まれた古いあずま屋と庭一面に散った花びらと、眠そうにベッドに横たわる作者の臃げな絵が浮かびます。

さて、最後の一句、「花落つること知んぬ多少ぞ」ですが、二つの解釈があります。一つは「昨夜の雨でどれだけ花が散ったことだろう」もう一つは「昨夜の雨できっと多くの花が散ったことだろう」という解

釈。一つ目が疑問なら、二つ目が推測、でしょうか。

これは、「多少」という言葉をどう理解するか、で違います。「多少」は中国語では「どのくらい」という意味の疑問詞ですが、多いか少ないかでいうと「多い」というニュアンスがあります。一方、日本語では、「多少のことならいいでしょう」と言うように、どちらかと言うと「少ない」というニュアンスになること。「多」と「少」で意味の重点が日中で違うということは、ある意味、新鮮でした。

その後で、庭一面に散った花は一体何の花か、という話で一同盛り上がりました。私は桃のようなピンクの花びらをイメージしていたのですが、椿ではないか、という意見もありました。

「ツバキはこの詩のイメージとしては正にピッタリですね。ただ、ツバキは今でこそ中国各地で見られる名花の一つですが、唐代では浙江省の会稽あたりにしかなかったそうです。したがって孟浩然がツバキを知っていたとは考えにくい。ちなみに中国ではツバキのことを「茶花」(cháhuā)と言って、山茶さざん花と区別しません」

「椿」は別の植物を指すのだそうです。

作者の猛浩然は、『三国志』や『十八史略』の舞台にもなっている河南省襄陽の生まれ、大変義侠心に富んだ人物で、李白とともに仙人を目指したこともあり、隠遁生活をしてきました。689年生まれの猛浩然は、李白より12歳年上です。時は玄宗皇帝の時代でした。詩歌管弦等、芸術を大変重んじた玄宗皇帝に仕えようと人の紹介を頼り、何度もトライするのですが、肝心の時に引っ込んでしまう。そんなことを繰り返して、隠遁生活を続けます。最後は親友が都から訪ねて来てくれたのを喜んで、病み上がりにもかかわらず、お酒を飲みすぎて亡くなったと言われています。

さて、面白かったのが植田先生の猛浩然へのコメントです。

「ここ一番で引いてしまう意志薄弱なタイプ。オトコに多いですね。変にプライドがあると言うか。頭下

chūn xiǎo
春 晓

mèng hào rán
孟浩然

chūn mián bù jué xiǎo
春 眠 不 觉 晓

chù chù wén tí niǎo
处 处 闻 啼 鸟

yè lái fēng yǔ shēng
夜 来 风 雨 声

huā luò zhī duō shǎo
花 落 知 多 少

sòng yuán èr shǐ ān xī yáng guān qǔ
送元二使安西(阳关曲)

wáng wéi
王维

● ○ ○ ● ● ○ ○
渭 城 朝 雨 浥 轻 尘

● ● ○ ○ ● ● ○
客 舍 青 青 柳 色 新

● ○ ● ● ○ ○ ●
劝 君 更 尽 一 杯 酒

○ 西 ● 出 ○ 阳 ○ 无 ● 人
xī chū yáng guān wú gù rén

げん じ あんせい つかい
元二の安西に使うを送る

陽関曲 王維

いじょう ちょう う けい じん うるお
渭城の朝雨軽塵を浥す

かくしや せい せいりゅうしよくあらた
客舎青青柳色新なり

君に勧む更に尽くせ一杯の酒

にしのかた しょうかん いづ こじん な
西のかた陽関を出れば故人無からん

げてぺこぺこしたくない。それでもって肝心なところで身を引いてしまい、後悔を繰り返しながらも、最後は自分の世界に安住する。同性としては非常に共感を感じます。そういうオトコが、1300年経っても人々に愛唱され続ける詩を残したんだから、こういう性格でも恥ずかしくないと思いますね。そういう目でこの詩を読むと何とも愛おしく感じるんですよ]

と。植田先生も、若い頃この詩を読んだ時には何処が良いのかわからなかったそうですが、今では愛おしくてたまらない。名作とはやはり、人生の深みとともに味わいを増す、不可思議な存在なのだ改めて思いました。

次の詩は猛浩然の親友だった王维の『送元二使安西(阳関曲)』でした。

陽関曲となっているのは、この詩が後世メロディーを付けて歌われていたからです。『唐詩選』には七言絶句として、『唐詩三百首』では「楽府」として納められています。

「この詩も《春晓》と同様、粘法・反法が近体詩の作法に合っていないのですが、この作品も別れの詩として非常に味わい深い。特に最後の一行「西のかた陽関を出れば故人なからん」は大変有名ですね。故人は日本語では亡くなった人のことを指しますが、中国語ではよく知っている人、つまり友人を指します。陽関にはノロシ台が今も残っていますが、ここから西の地は、漢民族がめったに足を踏み入れることのない異民族の土地なので昔は生きて帰れるかは分からなかったのです。その為、別れの日の前に一週間くらいかけて、毎夜酒を酌み交わしたそうです。

私もその昔、陽関の地を踏みましたが、ゴビ砂漠が広がるもの寂しい風景は、現代でもラクダや馬で旅をしたら、生きて帰れるのか、と思わずにいられない荒涼とした土地でした」

みんなで漢詩の朗読を堪能した後、植田先生自ら数字譜に起こされた譜面を配布され、南曲と呼ばれる5音音階と、北曲と呼ばれる7音音階の2種類の歌を歌っていただきました。5音音階はファとシがなく、ペンタトニックとも言われます。日本の民謡もこの部類が多いですね。7音音階はシルクロードを通じて中央アジアから伝わったと言われていています。メランコリックなマイナー調で、聞いた途端、西域の雰囲気が出ます。

植田先生は日本語の歌詞も付けてくださっていました。

夜明けの雨にさらされて

柳の緑が目にしみる

名残の酒をいま一度

さいはての地に行く君よ

因みに中国伝統音楽の楽譜では、楽器や音楽のジャンルごとにさまざまな記譜法が使われていたのですが、東洋諸国で広く使われた工尺譜(こうせきふ又はこうしゃくふ)というのがその一つで、「低いソ、低いラ、低いシ、ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ」にあたる音階を、それぞれ「合、四、一、上、尺、工、凡、六、五、乙」の漢字を用いて表記します。1オクターブ高い音は、漢字の左側に人偏を付けるそうです。

ついに漢詩の講座に楽譜や歌まで！新たに植田先生の扉が開いた奥深い講義でした。